



農林振興局長
丸田雅博

昭和60年農林水産省入省、中国四国農政局事業計画課長を経て平成21年4月より現職。

大崎市の地域ブランドの確立を

大崎市に実際に来てみて、肥沃な大崎耕土と豊かな自然環境の中に、まだまだ十分活かされていない地域資源、つまり潜在能力が数多くあると感じました。

今日、農業を取り巻く状況が大きく変わっています。これまで以上に、農業地域において農業のみが発展することはないと考えています。

従来どおりの業種別の取り組みにとどまらず、地域資源・宝の活用に大崎市全体で取り組み、大崎発の農産物、商品、観光、交流などに地域ブランドという付加価値をつけましょう。

農商工連携やバイオマスの利活用など新しい事業が生み出される地域づくりです。

大崎市の地域ブランドの確立は、新しい経済基盤を整備し、未来にバトンタッチすることと言えます。



▶8月8日、旧鬼首中学校の体育館で「山学校入学式」が行われ、10人の定住希望者の山村での生活が始まりました。

地域の再生を託して

この夏、地域の農業の再生を模索する新たな試み「さつやま定住促進事業」がスタートしました。

鬼首に定住を希望する10人が、市から事業を委託されたNPO法人鬼首山学校協議会の職員として採用され、地元農家から米づくりの手ほどきを受けながら農業をはじめ林業や観光業に従事します。

そして、二年半の採用期間で、農産物を生産して販売するまでを実践の中から身につけることを目指しています。

地元の農家が、米づくりや山仕事などの技術を教えるかわりに、自分たちにはない新しい発想、発見を教わる、鬼首山学校が始まった新たな取り組みに注目が集まります。

昨年そして一昨年に行われた観光キャンペーンでは、田尻地域の「ふゆみずたんぼ米」は奇跡の米として、鳴子地域の「ゆきむすび」は人と人を結ぶ米として、全国に紹介され話題を呼びました。

「シナイモツゴ郷の米」。鹿島台地域でも、市指定天然記念物シナイモツゴの生息する水環境を守りながらそのきれいな水で栽培した環境保全米づくりが始まっています。

ササニシキは、希少価値の高い米になりましたが、古川地域の生産技術の高い農家で栽培された「有機ササニシキ」は今なお根強い人気です。大崎市内の各地域で新たな農業の取り組みと連携が生まれています。

地域の農地を守る受け皿として法人化

● 渋谷 誠司さん 三本木地域在住。 ㈱三本木グリーンサービス代表取締役



株式会社を設立して四十ヘクタールの水稲と十六ヘクタールの転作大豆の栽培に取り組んでいるのは渋谷誠司さんです。

渋谷さんは、十年前、ほ場整備が終わった水田で転作物の大豆栽培に取り組むことになった時、周辺の農家から大豆の作付けを頼まれました。これを機会に稲作と大豆を柱に農業に専念することになり、耕作面積も徐々に大きくなっていきました。

大きな転機が訪れたのは平成十九年の国の農政の大変革、農地解放以来の大改革とも言われた時です。

「品目横断的経営安定対策」が導入され、補助金などの制度が一変しました。

耕作を頼まれている農家からは「個人に頼むのでは、いつまでできなくなってしまうかもしれない」と法人化を求める声が寄せられました。

家族とも相談し、考え抜いた末に制度のメリットを最大限に利用できるように法人化に踏み切りました。息子の貴司さんも学校を出たら農業の道を進むと意思表示があったことも決断を後押ししました。

「法人化するには三十〜四十ヘクタールの面積が必要で、利益を出せるぐらいの規

模でなければ法人化する意味がない。会社という組織は農業をするのにはいいアイテムでした」と渋谷さんは話します。そして今、渋谷さんが最も精神的に取り組んでいるのは、ITを活用した新しい米づくりです。

同じ地域の田んぼでも、土地の性質は微妙に異なり、代々受け継いできた農家なら肌で染み付いていることでも、初めて作付けする田んぼでは、勘だけが頼りでした。

新しいシステムは、土壌、生育、収穫などの情報をすばやく収集して、肥料の入れ方や防除をむだなく行うことで、経費の削減と環境にやさしい農業を実現できます。

こうした取り組みの効果は、品質のばらつきのない良質な米づくり、食味ランクでも特Aの評価を受け、消費者に喜ばれています。

「自分たちは米価のいい時代を知らない。毎年引き下げられる状況で、下がったらその分経営努力するだけ。面積を広げられる余力はあります」と前向きです。

田んぼを大切に、農業を素早くついでいかに、きちりと仕事をこなしていくことで、農地を託してくれた農家に安心を与えています。

市長コラム 天・地・人

健康長寿を願う



敬老会の時期がやってまいりました。長い間家庭や仕事、社会のために尽くされ、めでたく長寿を迎えられました皆さまに心から敬意と感謝の誠をささげます。

先日、日本人の平均寿命が発表されました。女性が八十六・〇五歳、男性が七十九・二九歳。なんと女性性は二十四年連続で「長寿世界一」に輝きました。ちなみに男性は四位。大変喜ばしいことです。

大崎市には敬老会にご案内対象七十七歳以上の長寿者が一万五千六百三十八人（八月一日現在）おられますし、百歳以上の超長寿者が五十六人もおられます。

この夏、めでたく百歳を迎えられた超お元気なお二人をお祝いに訪問いたしました。お一人は岩出山地域在住のSおじいさん。自転車を取り返し、昔とつたきねづかで「まだ若い者には負けない」と町内の防犯灯

の修理工事等を行っておられるとのこと。もうお一人は古川地域在住のMおばあさん。食事の準備はもちろん、庭の草取りや近所の人とお茶のみ、週二回のデイサービスセンター通いとパワフルに現役生活。

お二人に共通していることは、体を動かすこと。自分の時間ペースを持っていること。地域とのつながりを大切にしていること。健康長寿の秘訣が隠されているようです。

お二人をはじめ本市の長寿者にはぜひ、大還暦百二十歳の記録を持つ泉重千代さんや、百五十一歳まで長生きしたイギリスのトーマス・パーさんを目標に健康長寿にチャレンジしていただきたいと願っております。

長寿者がその言葉通り、肉体的にも精神的にも充実して長く寿々社会を共に創ってまいります。

祈健康長寿、豊作。

大崎市長 伊藤 康志